

第2回学ぶ喜び・ESD 連続公開講座 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 2018年10月23日(火) 19時～20時30分
- ◇会場 次世代教員養成センター2号館多目的ホール
- ◇参加者 学生38名、現職教員等17名 計55名
- ◇内容

「教師として大切にすべきことは…」

ー 出会ってきた子どもたちが教えてくれてことー

講師：森井 弘先生



1. 教師として大切にすべきこと：私が大切にしてきた教育の根幹

「ディズニーランドでの話」

- ・亡くなった娘の誕生日のお子様ランチ

両親に連れられて歓声をあげる子どもたち、この風景をこのご夫婦はどのように思いつながめておられたのか。その気持ちに思いをはせると涙が止まらなかった。レストランの心温まる対応にも涙がこぼれた。

- ・教師になって4年目に教え子を失くした。卒業して4か月の夏休みに笠置の川で中学校の友達とキャンプに行き亡くなった。棺が霊柩車に運ばれるときの母親の「行ったらあかん。行かんといて」という声が、今も耳に残っている。

「修学旅行での話」

- ・32歳の時、スキー実習でクラスの女生徒が木に激突し、眉の上を骨折した。明朝、タクシーで駆け付けた母親は、麻酔で眠っている娘を見て泣いていた。女生徒のつらい思い出を学級のみんなどで少しでもいい思い出に変えようと、呼び掛けた。それに応えたクラスメートが千羽鶴を折ったり、手紙を書いたり、それぞれ活躍してくれた。子どものやさしさ、温かさが身に染みた。

- ・その子たちの卒業文集・その女生徒が記した「班日誌」3月4日

3年間で一番うれしかったこと：それは修学旅行でのこと・クラスの友達がいろいろとはげましてくれたこと・みんなが心配してくれたこと・そのおかげで早く学校に行きたいと思った。

「スキーの技術を学んだり、美しい山の景色を見ることができなかったけど、その何倍もすてきなみんなの優しい心にふれることができた。こんなクラスになれたことが3年間で一番よかったこと。」

班日誌を読むと、クラスメートは泣いていた。

- ・女生徒の脳に腫瘍。医者から「この事故はあってよかった。この事故がなければ、腫瘍を見つけることができなかった。腫瘍が大きくなり、自覚症状が出てから、手術をしたら、間違いなく後遺症が残った。だから、この事故はあってよかった。」と。

- ・高一の夏、脳腫瘍の手術後（顔半分がマヒ状態）、学校に行かないといった女生徒。

どうしたものかと思い、自分の中に回答がないまま、女生徒と話し合い、学校に行かなくてもいいと言った。「リハビリがんばろな」とだけ言って帰った。

でも、9月1日から女生徒は登校した。それを聞いて、お母さんと泣いた。

- ・結婚時の相談。腫瘍の再発で結婚が破棄されるのが怖く、プロポーズに返事できなかったとなく女

生徒。腫瘍のことを彼に伝えるよう話す。

女生徒と結婚相手と私の3人の面談でのこと。腫瘍のことを気にしない、という返事。

再プロポーズの依頼に応えた彼。プロポーズに素直に応えた女生徒。

今、幸せに暮らしている。

→ 修学旅行時、教員はほとんど寝ることができない。

修学旅行は中学校生活で最も大きなイベント：生徒にとって最も思い出に残る行事

でも、何より大事なことは、「生徒を無事に連れて帰ってくること」

◎教師にとって一番大事なことは 親御さんからお預かりしているかけがえのない「**子どもの命を守ること**」。

「縁を生かす」

・教師の出会いによって子どもが変わる。子どもの人生が変わる。

子どもの背景に気づき、正面から向き合い、よりそったことで、子どもの人生が変わる。教師冥利につけるが、逆に考えると怖い。責任を感じる。反省や悔やむことの方が多い。

教え子に今もあやまりたいこと：体罰したこと

これは人として許せない、命にかかわる失敗をしたとき、体罰をした。

「先生の厳しい指導のおかげで、立ち直れました」と言ってくれるが、体罰は絶対に許されない行為。体罰は、力量のない教師がすること。

時間をかけてもいいから、子どもと本物の人間関係をつくって指導してほしい。

◎教師にとって2つ目に大事なこと「**子どもを幸せにすること**」

◎3つ目に大事なこと「**子どもの心を育てること**」

先生方の日々の語らいの中で、声掛けの中で、終わりの会での話の中で子どもは心を育てていく。

「子どもの心を育ててやってください」

教師自身が経験した話、感動した話は子どもの心に届く、心に響く、心を揺さぶる。

そうすることで、子どもの心の引き出しが増える。この引き出しが、悩んだり苦しんだり挫折した時、子どもを守り救う。

○私は「想定外」という言葉は、間違っていると思っている。それで事故があったとき、保護者はけっして納得しない。最悪の事態を想定して対応を考えておくことが危機管理だ。



2. 事例研修

事例1：「いじめ」

中2女子 母親から子どもが学校で十数名の男子生徒からいじめられている。娘は、もう学校に行きたくない、死んでしまいたいと、今も部屋にこもって泣いていると、担任に電話があった。担任は夕食時に飲酒している。その担任から、生徒指導主任にどうしたらいいかという、相談があった。

→ これからすぐ行こう（すでに飲酒していたが）。命守るのが一番。すぐに行く。もし、その子が死んだら、どれだけ悔やむ。最悪の想定はその子が死んでしまうこと。

A子にいじめに気付かなかったことを謝罪。状況把握後、いじめをしていたBの家に12時過ぎだが行った。Bの父親はBの頬をなぐった。

「お前の頬の痛みは10分もすればとれる。でもおまえがいじめたA子さんの心の痛みは一生とれへんのや。」

Bの父はA子の家に行こうとしたが、夜中なので、教員がA子の家に行って伝えた。

翌朝、Bの父はBを連れてA子の家に行き、土下座してあやまった。

事例2：「体罰」

清掃時間中、掃除をせずに走り回っていた男子生徒5人を、他学年のA先生が呼び止め、指導。その指導に対し、B君が反抗的な態度をとったため、A先生はB君の頬を平手でたたいた。A先生とB君の話し合いの場を設け、双方共に謝罪。解決したと判断した担任は、B君宅に電話。電話に出た父親にことの概要を伝えると共に、詳しく説明と謝罪をしたいので、学校に来ていただけないかと言うと、「うちはラーメン屋やっているから忙しい。謝罪なんかいいから、うちの子なぐったその先生、クビにしてくれ。」と、言われた。

→ この報告があったのは、父親から電話を切られてからだだった。ハウレンソウが大事だと言っていたのに報告がなかった。担任は、「解決した」と思ったと、話す。

学校に非があるのに、学校に呼び出すのは間違っている。

11時30分にラーメン屋に行った。そして、謝罪（体罰のこと、呼び出したこと）。学校に落ち度があったら、教師に落ち度があったら、素直に謝ること。そして、誠意を尽くせば、ほとんどの問題は解決する。

事例3：「虐待」

中三女子 A子は担任に反抗的。遅刻、化粧、ピアスなど、問題行動がある。その都度、指導するものの、素直に指導に従わないばかりか、ますます反抗的な態度をとる。まずは、人間関係をつくろうと、声かけしたり、家庭訪問をするが、なかなか心を開いてくれない。ねばりづよく、声かけや家庭訪問を繰り返す中で、ようやく担任の話に耳を傾けるようになってきた。夏休みに入る直前、「私の母親は再婚で、父親は本当の父ではない。その父親から、母親がいないときに性的虐待を受けている。」との相談があった。ただ「このことは、絶対誰にも言わないで。もし言ったら、先生のこと、信用しない。」と、強く言う。

→ この担任はえらかった。人間関係を作っていたから、この子から事情を聞き出すことができた。

「しゃべったら、先生のこと信用しない」と言われた。教員は、その子との人間関係を失いたくないと思って、しゃべらないことが多い。でも、それは間違っている。

「どうしても君を守りたい、でも自分だけでは無理だ。校長と養護の先生には言う」と言い切った担任の対応はすばらしい。

◎対応に正解はない。大切なのは「子どもを守ろうとしているか」「子どもを幸せにしようとしているか」だ。

学校では色々なことが起こる。次の3つを基準にして、何をどうすればよいかを考えてほしい。

「子どもの命を守る」

「子どもを幸せにする」

「子どもの心を育てる」

→ 誠意をもって対応しても、どうしてもうまくいかない場合もある。その場合は、教育委員会や教育委員会を通して弁護士に相談する。そのとき、時系列に事実の概要や保護者との対応の記録を残しておくことが、大切です。

